

荊州高台墓地の構造に関する一考察

小澤 正人

はじめに

本稿の目的は湖北省荊州市高台秦漢墓を対象として、この墓地の構造を明らかにすることにある。

湖北省荊州市は戦国時代楚国の都城、すなわち紀南城の所在地である。そのため荊州市では多数の楚墓が確認されている。楚は紀元前278年に紀南城を秦の白起に落とされ、安徽省へと遷都することになり、荊州市を含む地域は秦の支配下に入り南郡と称されるようになる。南郡の郡治はやはり現在の荊州市に置かれ、漢はこれを継承した。このため荊州市では秦漢墓も多数分布している。これら墓葬では湿潤な土地柄のため有機物の保存がよく、特に近年では簡牘が多く出土し、中国古代史研究にも新たな資料を提供している。

本稿で対象とする高台秦漢墓地もそのような荊州市に位置する遺跡の一つである。発掘調査は1992年におこなわれ、5ヶ月をかけ40基余りの墓葬が調査された。調査では簡牘が出土し、その内容を含んだ簡報が1993年に発表されたことで、高台墓地は広く知られるようになった¹⁾。その後2000年に報告書が刊行され、その全容が明らかになっている²⁾。報告書では墓地の年代を秦から前漢前半として6期に分期し、さらに主に墓葬の主体部から墓地の階層性についても言及し、漢代の爵制にあわせて被葬者の身分を推定している。

ただし筆者は爵制による身分と墓葬の主体部を直接関連づけて考えることには、若干躊躇を覚える。むしろそれ以前の問題として、まず墓葬の階層性や墓地内の集団のありかたといった、墓地の構造を明らかにすることが重要であり、

身分制がどう墓葬に表現されるのかといった問題はこのような検討を積み重ねた上で議論されるべきだと考える。

以上のような考えに基づき、本稿では高台墓地の構造を明らかにすることを目的にする。具体的には主体部の分類、副葬品の出土状況の分析などから埋葬にあたっての規制を明確にし、そのうえで墓葬間の階層関係、集団関係などを検討することで、高台墓地の構造を明らかにしたいと考えている³⁾。以下まず墓地について概観する。

1 高台墓地の概観

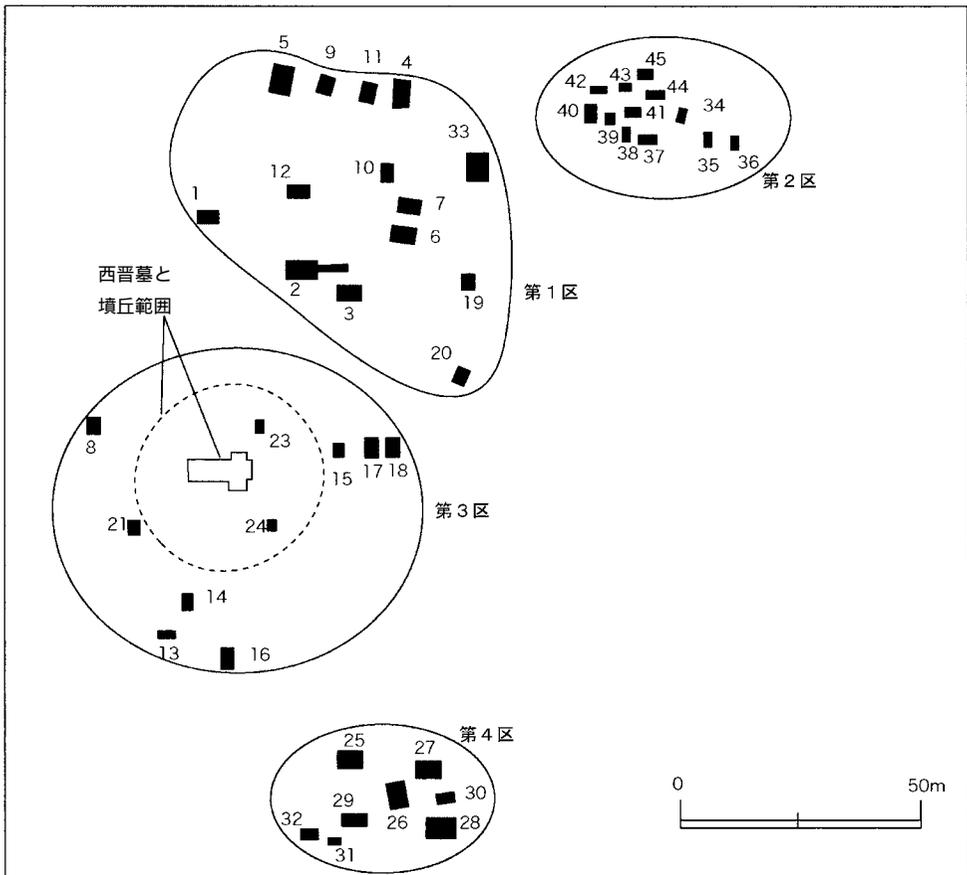
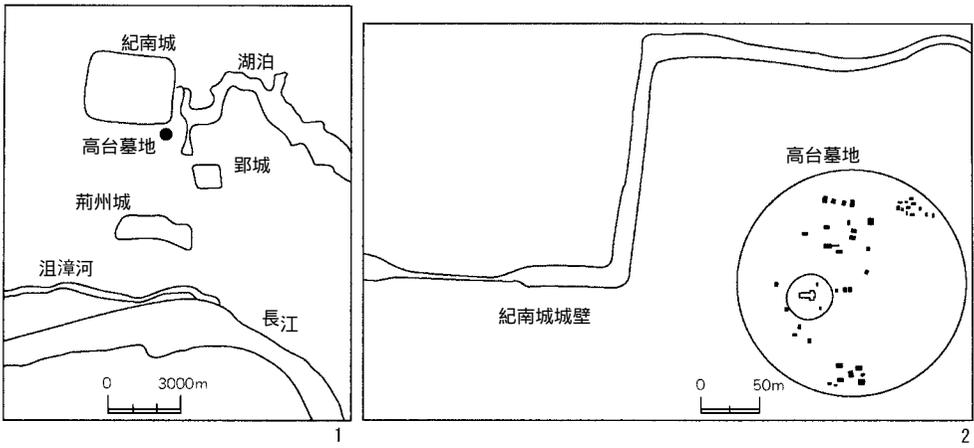
高台墓地は楚の都城であった紀南城の南東隅にあり、紀南城の東城壁から100mに位置している(第1図1・2)。墓地は「高台」とよばれる台地上に位置している。この台地は発掘調査により東周時代の遺跡であることがわかっている。つまり高台墓地は東周時代の遺跡を破壊して造営されたのである。高台墓地が造営された秦から前漢時代の南郡の中心であった江陵城は、墓地の東南3.5kmにある郢城に比定されており、高台墓地の被葬者はこの郢城との関係が推定される。

発掘調査された墓葬は45基で、墓地中央やや南側にある大型の墳丘を持つ22号墓が西晋墓である以外はすべて秦から前漢時代前・中期のものである(第1図3)。

報告書では墓葬の分布から4つの地区に分けている(第1図3)。第1区は墓地の北部で14基の墓葬があり、比較的大型の墓葬が含まれる。第2区は墓地東北部で12基の墓葬があり、小型の墓葬が多い。第3区は墓地中部のやや西側で10基の墓葬がある。第4区は墓葬南部で8基の墓葬がある。

また報告書では出土遺物の検討から全体を5段に編年している(第2図)。それによると第1段は統一秦時代で第2区の1基のみが該当する。第2段は前漢初年から文帝時期までで、第1区で7基、第2区で6基、第3区で6基、第4区で1基の墓葬がある。第3段は景帝時期で、第1区で2基、第3区で2基、第4区で1基の墓葬がこの時期にあてられている。第4段は武帝時期の元狩5年以前で、第1区で2基、第2区で5基、第3区で1基、第4区で2基の墓葬があるとされる。第5段は武帝元狩5年以後から昭帝期で、第4区の3基のみがこの時期とされている。この他に副葬品がなく時期比定が困難な墓葬が6基

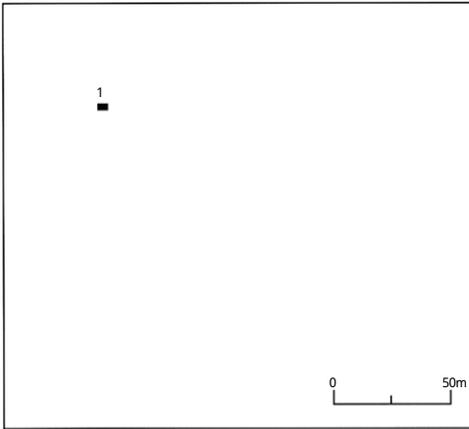
荊州高台墓地の構造に関する一考察



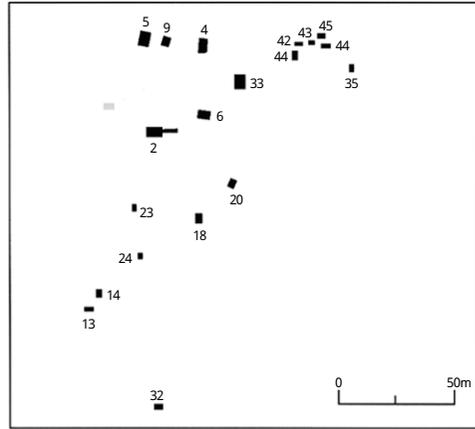
第1図 高台墓地の位置と墓葬の分布
(注2文献図一・図二を改変)

3

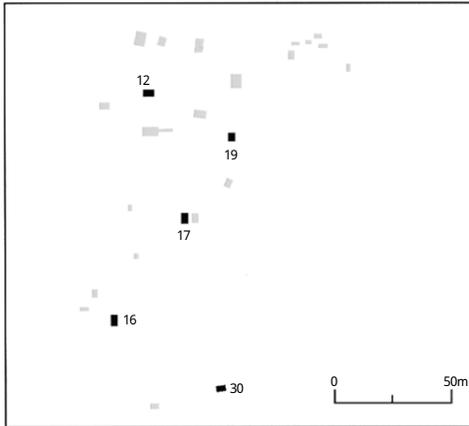
社会イノベーション学部



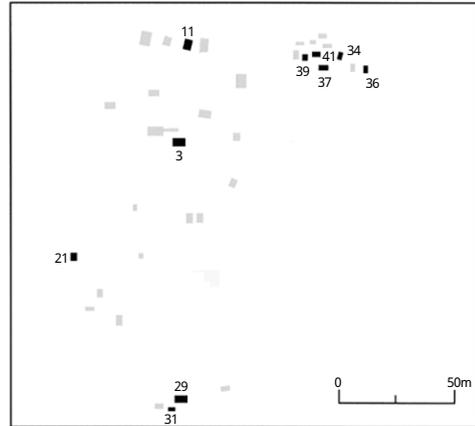
第 1 段



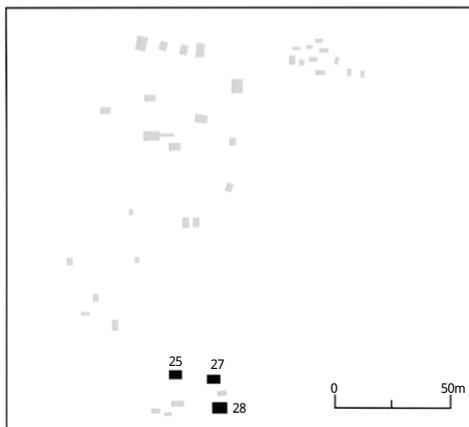
第 2 段



第 3 段



第 4 段



第 5 段

第 2 図 高台墓地の時期変遷
(黒は該当する時期の墓葬
灰色はそれ以前の墓葬 を表す)

存在している。

以上が高台墓地の概要である。高台墓地はほぼ 150 年にわたり造営が続けられ、40 基あまりの墓葬が確認されているわけであるが、時期ごとの墓葬数は決して多くはなく、墓地は時間をかけて徐々に形成されていったことがわかる。また報告書では分布状況から墓地を 4 つの地域に分けているが、第 1 段と第 5 段を除けば、全ての地域で墓葬が継続して造営されており、墓地内での墓葬造営域の移動があったわけではなく、4 地域が同時に墓域として機能していたことがわかる。さらにかなり密集した部分でも、時期の降る墓葬が、より早い時期の墓葬を破壊した例がないことから、地上部分には何らかの標識や墳丘があったと考えられる。

これらのことを留意した上で、次に墓葬の構成要素について検討をおこなう。

2 墓葬構成要素の検討

高台墓地における検討可能な墓葬の構成要素としては (A) 主体部と (B) 副葬品がある。以下それぞれ個別に検討する。

A 主体部 (第 3 図)

高台墓地の墓葬は全て竪穴土坑墓で、主体部から木槨木棺墓、木棺墓、葬具のない無棺墓に大きく分けることができる。報告書では木槨木棺墓を木棺の違い、規模の大小からさらに細分している。報告書の分類は以下の通りである。

甲 A 類：一槨重棺墓 (1)

甲 B 類：一槨併棺墓 (2)

乙 A 類：一槨一棺墓のうち槨室長 4m 以上のもの (3)

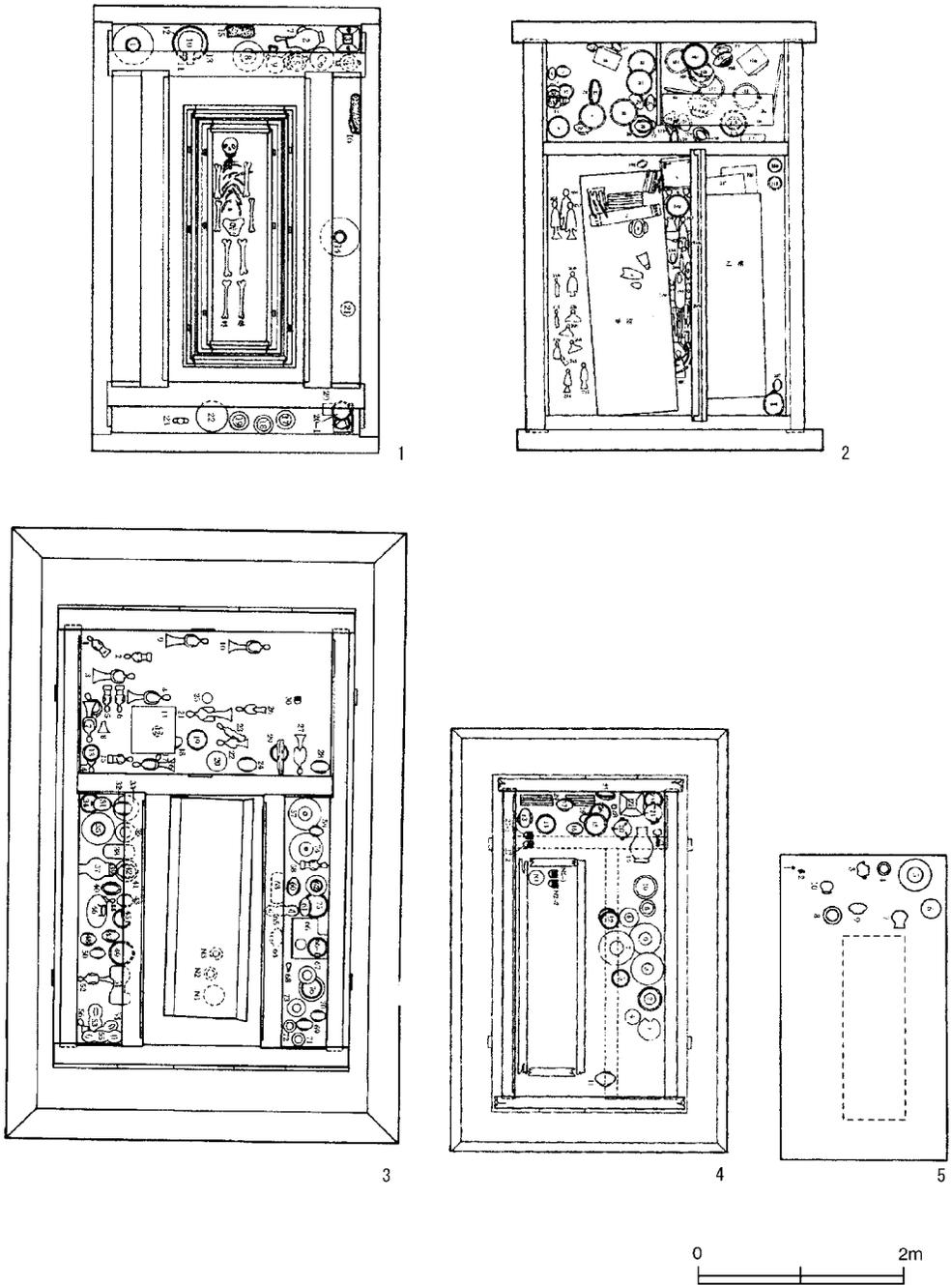
乙 B 類：一槨一棺墓のうち槨室長 3m 以下のもの (4)

丙 類：木棺墓 (5)

丁 類：無棺墓

以上の各主体部について、報告書では代表的なものの実測図が掲載されているのみで、各墓葬ごとの実測図や実測値は報告書中に記載されていない。そのため本稿ではこれ以上の検討はできないため、主体部については基本的には報告書の分類に従うこととする。ただし甲類とされた墓葬も規模からすると乙 A 類に含まれる。そこで本稿では記述のために、以下のような分類を用いる。

木槨木棺墓 A 類：報告書の乙 A 類



第3図 高台墓地の葬具

(1: 5号墓 2: 28号墓 3: 33号墓 4: 11号墓 5: 37号墓)

- 木槨重棺墓 : 報告書の甲A類
木槨併棺墓 : 報告書の甲B類
木槨木棺墓B類 : 報告書の乙B類
木棺墓 : 報告書の丙類
無棺槨墓 : 報告書の丁類

さらに木槨木棺墓A類・木槨重棺墓・木槨併棺墓・木槨木棺墓B類の総称として「木槨木棺墓」を用いる。

主体部については、その基本は木棺であり、木槨木棺墓はそれに木槨が付加された形態だとすることができる。従って木槨や木棺の構造が複雑或いは規模が大きな墓葬ほど価値が付加されるのであり、階層的には上位に位置づけられることになる。

B 副葬品

副葬品はその用途から、(1)飲食器、(2)明器、(3)装飾品、(4)家具、(5)その他に分類される。以下この分類ごとに検討してゆく。

(1) 飲食器 (第4図)

飲食器はその材質から (a) 青銅器、(b) 日用陶器、(c) 漆器に分類される。またそれぞれの器物は、その機能から煮炊きに使う「煮沸具」、料理などを盛りつける「供膳具」、酒などの液体を汲む「供酒具」、穀物や酒などの液体を入れる「貯蔵具」、料理や酒などをすくう「挹注具」に分けられる。第4図は飲食器をまとめたもので、以下これに従って飲食器を材質ごとに概観する。

(a) 青銅器とそれを模倣した陶器 (第4図1~27)

飲食器としての青銅器は西周時代から春秋戦国時代にかけて、祭祀・儀礼に用いられてきた器物であり、社会的な身分・地位の象徴として扱われてきた。青銅器を「礼器」と呼んだのはまさにこのことによる。しかし始皇帝の統一以後青銅器は社会的な身分の象徴としての役割を失ってゆく⁴⁾。

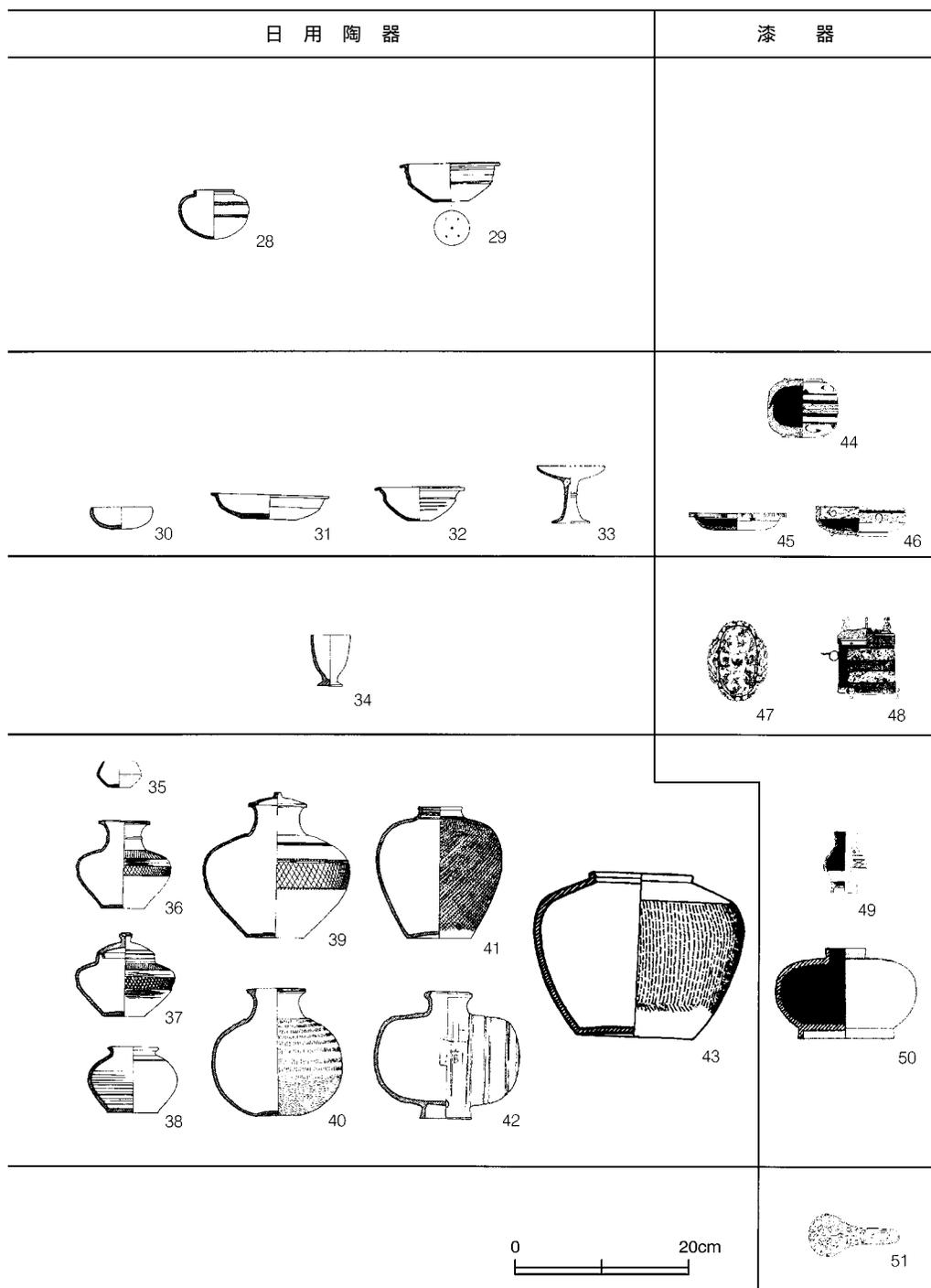
ただし青銅器の飲食器自体は漢代以降も継続して使われている。漢代の青銅器には祭器・儀器としての伝統があり、材質が飲食器として一般的であった陶器とは異なっていたことから、陶器よりもやや高級な飲食器として扱われたと考えられる⁵⁾。また金属としての材質から、特に煮沸具として日常的に使われた場合もある。前者としては鼎・壺などがあり、後者には釜・釜などがある。

また青銅器を模倣した陶器も作られている。これら陶器は実用器というより

	青銅器	青銅器模倣陶器
煮沸器		
供膳器		
供酒器		
貯蔵器		
挾取器		

第4図 高台墓地出土の飲食器

荊州高台墓地の構造に関する一考察



1号墓：7 28 34 45 46 2号墓：2, 18 26 4号墓：1 5 9 20 25 5号墓：6, 11 42 6号墓：32 47 48 50
 8号墓：3 9号墓：21 12号墓：10 13号墓：31 16号墓：23 17号墓：8, 12 18号墓：13, 19 22 24,
 27 27号墓：35 38 41 28号墓：29 51 33号墓：30 39 44

も、副葬用の明器と考えられる。ここでは青銅器とそれを模倣した陶器をまとめて扱う事とする。

戦国時代の荆州市は楚国の中心であり、多量の墓葬が造営されたが、その多くには青銅礼器や青銅礼器模倣陶器が副葬されていた。紀南城が白起により抜かれ、秦の統治が始まると共に青銅礼器系の副葬品は減少してゆく。高台墓地でも青銅礼器系の器物を副葬した墓葬は多くはなく、副葬点数も限られている。

副葬された青銅器には、煮沸具、供膳具、供酒具、貯蔵具、挹注具がある。

煮沸器の代表的な器種が鼎である。鼎は西周時代以来継続して作られた青銅礼器でもある。高台墓地で出土しているのは、戦国時代以来楚の領域で使われていた足が長い「楚式鼎」タイプ(1)、やはり戦国時代以来みられる長足のタイプだが、長江以南に分布の中心がある「越式鼎」タイプ(2)、戦国時代の中原に本来の分布があり、秦代以後全国に分布するようになる足が短い「中原式鼎」タイプ(3)がある。本稿では報告書に従い、楚式鼎をA型鼎、越式鼎をB型鼎、中原式鼎をC型鼎と表記する。このうちA型を模倣した陶器(7)、C型を模倣した陶器も出土している(9)。

この他煮沸と関係ある青銅器には釜(4)、獲(5)、甗(6)がある。釜は口縁部がすばみ、環をもつ鍋の一種。もともと四川盆地に戦国時代初頭から分布していた器種で、やはり秦の占領以後荊州地区にも持ち込まれた。獲も鍋の一種と考えられるが、釜とは異なり口縁部が広い。甗は下部が羽釜状で、上部には甑がつき、更には獲が蓋となる場合もある。甗は西周時代以来の礼器だが、本来は甗の下部が鬲或いは鼎状をしていた。その後戦国時代にはいると秦や中原では下部が釜状のものがあられ、このタイプが漢代以後の中心となってゆく。高台墓地で出土しているのもこの種のタイプで、下部が羽釜状となっている。

供膳器には盆(9・10)と盤(11)がある。盆はやや深めのボール状の食器である。環首があるタイプ(9)とないタイプ(10)がある。盤は本来匱とともに青銅礼器の中の盥器に分類されていた。盥器とは手を洗うための器であり、匱で汲んだ水で手を洗い、盤でその水を受ける、といった用途が想定されている。しかし漢代にはその役割に変化が生じており、盤は盆と同じような供膳器として使われるとともに、液体を溜める洗面器的な役割ももち、さらには鍋のような使われ方もしている。高台墓地でも5号墓出土の盤の底部にはススが付着しており、煮炊きにも使われたことがわかる。このように盆は多様な用途に使われていたが、ここでは供膳器に分類しておく⁶⁾。

青銅器模倣陶器として盒が出土している(12・13)。盒は中原で発達した器種であるが、戦国時代中期から楚の領域にも現れ、戦国時代後期には広く分布するようになる。高台墓地では青銅製の盒は出土せず、模倣陶器のみが出土している。13は上下が同型のタイプ、12は蓋と身に分かれるタイプである。

供酒器としては鑊壺(14・15)と匜(16)がある。鑊壺のうち、13は把手がつくもので、戦国時代から連続する器形。14は柄が付くもので、漢代以降に現れる形態である。本稿では前者を「把手付鑊壺」、後者を「柄付鑊壺」と呼ぶ。鑊壺を模倣した陶器は出土していない。匜は先に述べたように青銅礼器の中では盥器に分類される器種であったが、同時に酒などの液体を注ぐ役割も持っており、漢代以後はむしろこちらの役割が中心になっていったとされる⁷⁾。17は匜を模倣した陶器で、これも戦国時代から見られる形態である。

貯蔵器はバリエーションに富む。18・19は壺。壺は鼎とともに戦国時代の青銅礼器の代表的な器種であり、漢代に入ってから使われ続ける。18は頸部が細く、胴部は球状、圈足がやや低いタイプで、戦国時代の典型的な壺のタイプである。それに対して19は頸部が太く、肩部が張り、圈足が高く、漢代以後に一般的になるタイプである。本稿では報告書に従い、前者を壺式、後者を壺式と呼ぶ。また壺を模倣した陶器も出土している(22・23)。基になった青銅壺を比定するのは難しいが、22は壺式を、23は壺式を模倣した可能性がある。20は釭。釭は荊州地区では戦国時代後期にあらわれ、漢代まで継続して使われる。模倣した陶器は出土していない。21は口縁部が特徴的な蒜頭壺。蒜頭壺は戦国時代の秦の領域でまずあらわれ、秦が六国を占領する過程で各地にひろがってゆく。荊州地区でも秦の占領以後に現れる器種である。陶器の24は口縁部を欠いているために判断が難しいが、頸部・胴部の形状から蒜頭壺を模倣したものと考えておく。

挹注器には匙がある(25)。これを模倣した陶器が出土している(26)。陶器では匙の他に斗を模倣したのも出土しているが(27)、こちらは基になった青銅器は出土していない。

(b) 日用陶器(第4図28~43)

陶器には上記のように青銅礼器を模倣したものがあるため、祭祀や儀礼に限定されず、日常生活で一般的に使われる陶器を「日用陶器」と呼ぶこととする。日用陶器には煮沸具、供膳具、供酒具、貯蔵具などがある。

煮沸器では釜（28）と甑（29）が出土している。釜は単独で、或いは甑と組み合わされて使われたと考えられる。

供膳器には碗（30）、盤（31）、盆（32）、高杯（33）がある。盤は皿状の食器。盆は盤よりも深く。ボール状の食器。高杯は皿が浅いタイプである。

供酒器は杯のみが出土している（34）。

貯蔵器は青銅器同様に器種が多い。折腹壺（35）は高さ5cm前後の小型のもので、胴部が屈曲する。小型高頸壺（36）は頸部が長く肩部が張る壺状の器種。矮頸罐（37）は逆に頸部が短い器種である。なお報告書で「平底罐」と分類された器種があり（38）、口縁の形状などが矮頸罐と異なっているが、頸部が短く、平底の罐という点では共通している。そこで本稿では両者を同一形式として捉え、その中で小形式と考える。同様に報告書中で「硬陶」に分類された器種のうち小型のものもその形状から矮頸罐に含めた。高頸壺（39）は小型高頸壺よりも大型のもの。高頸罐（40）は頸部が長く、胴部が膨らみ、底部は僅かに凹状になる。小口罐は硬陶で胴部に叩き目を残すことが特徴である（41）。繭型壺（42）は胴部が繭状の器種。大口甕（43）は大型の甕である。

第5図は出土した貯蔵器の大きさを比較するために、明らかに小型の折腹罐を除いた貯蔵器の高さをまとめたグラフである。これから25cmと35cmで連続していない部分があることがわかる。これに注目すると、高さが25cm以下のものを小型、26cmから35cmのものを中型、35cm以上のものを大型といったような区分ができそうである。第6図は先の分類に従い、器種ごとに高さを表したものである。このグラフから器種ごとに大型・中型・小型に分類できることがわかる。すなわち、小型としては小型高頸壺、矮頸罐がある。中型には高頸壺が該当する。高頸罐は若干小型のものがあるが、中心となっているのは高さ25cm以上のものであり、これも中型として問題ない範囲と考える。その他中型には出土点数が少ないためグラフには表さなかったが、小口罐や繭型壺も含まれる。大型には大口甕が該当する。

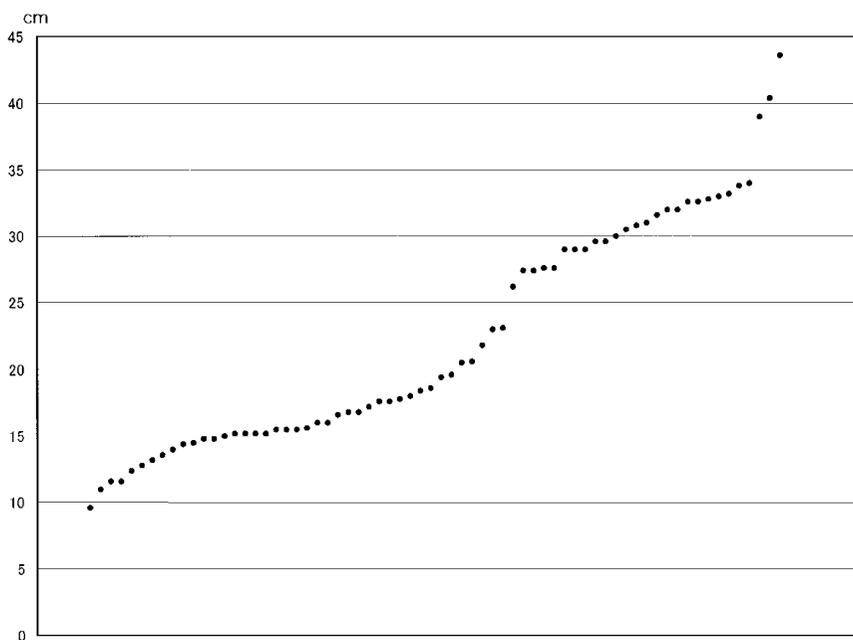
(c) 漆器（第4図44～51）

漆器には煮沸器以外の器種がある。

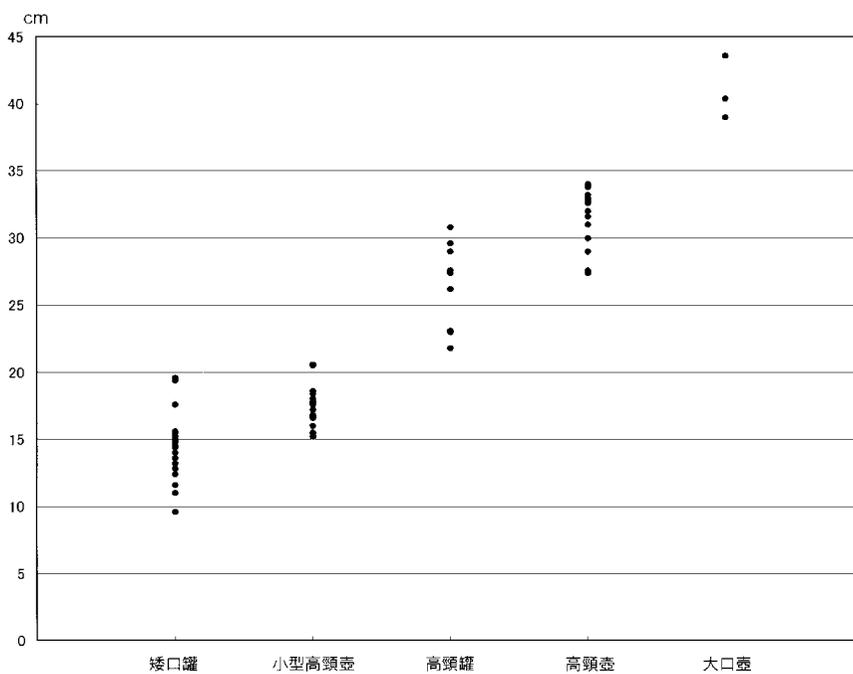
供膳器には盒（44）、盤（45）、盂（46）がある。盒は青銅器模倣陶器の盒に似る。盤は皿状で、日用陶器のものよりも小型のものが多い。盂は碗状のもの。

供酒器には耳杯（47）、尊（48）がある。耳杯は杯として使われた器種。尊

荊州高台墓地の構造に関する一考察



第5図 貯蔵器器高の分布



第6図 器種別の器高の比較

は酒を入れておく徳利のように使われた。

貯蔵器には、小壺（49）、偏壺（50）がある。小壺は小型の壺である。偏壺は胴部が扁平な壺を指す。

挹注器には匙がある（51）。

（2）明器（第7図1～4）

明器には木製のものと陶器製のものがある。

木製のものとしては人物俑、動物俑、木車などがある。人物俑は立俑（1）、座俑、騎馬俑（2）などがあり、立俑・座俑には男女の俑がある。動物には牛があり、これは木車と対になる可能性もある。

陶製のものとしては穀物倉（3）と竈（4）がある。竈には小型の釜と甑がつく場合もある。

（3）化粧道具（第7図5～9）

化粧道具は道具入れと個々の道具からなる。道具入れは「奩」と呼ばれ、漆器で作られている（5）。この中に白粉などを入れたと考えられる小型の漆盒（6）や櫛が入れられる。櫛には歯が荒い「梳」（7）と細かい「篦」（8）がある。さらに化粧に使ったものとして銅鏡（9）がある。

（4）装身具（第7図10～12）

身につけるものには帯鉤（11）、杖（13）、鉄剣（14）がある。帯鉤は銅製である。杖は木製で、先端には鳥がついている。『後漢書 卷5 礼儀志』案戸の条には

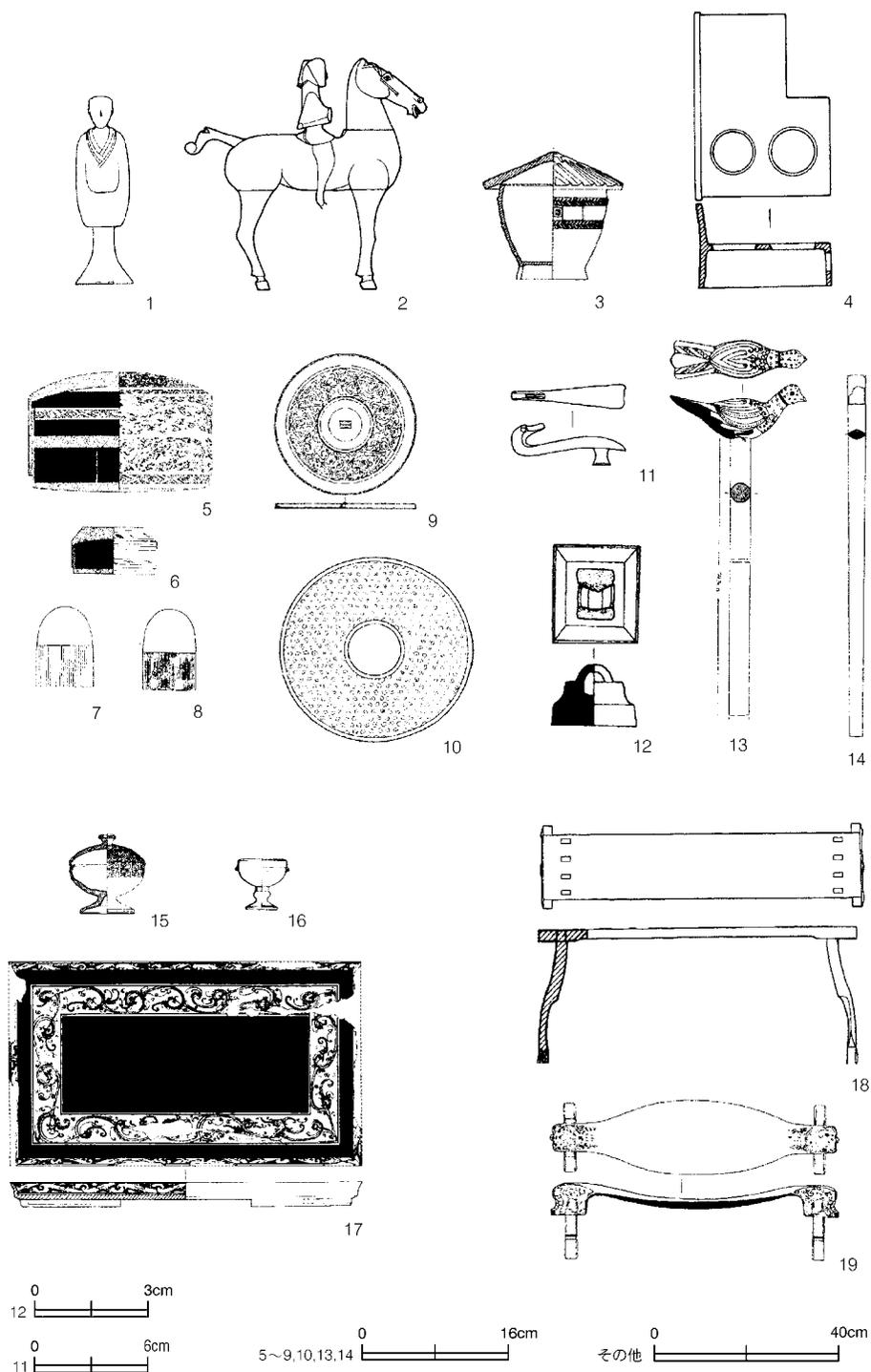
仲秋之月，縣道皆案戸比民。年始七十者，授之以王杖，舖之 粥。八十，九十，禮有加賜。王杖長九尺，端以鳩鳥爲飾。

とあり、後漢時代には70歳以上の老人に与えられた杖に鳩がついていたことがわかる。前漢時代の記録はないため、判断は難しいが、関連が考えられる。

（5）家具（第7図15～18）

家具としては、まず香炉があげられる。15は陶器製。16は青銅製である。

荊州高台墓地の構造に関する一考察



第7図 高台墓地出土遺物

(1号墓 : 18 2号墓 : 2, 9, 17 3号墓 : 12, 13 4号墓 : 16 5号墓 : 3, 4 6号墓 : 1, 5, 11
 11号墓 : 8 25号墓 : 10 27号墓 : 14 28号墓 : 6 29号墓 : 7 33号墓 : 19)

17は漆器の方形平盤。飲食器を載せるための家具と考えられる。18は漆器の几で、テーブルの一種である。19は漆器の枕と考えられている。このほか六博盤も出土している。

(6) その他(第7図10~12)

その他の副葬品としては櫛玉壁(10)・木壁, 印章(12), 半両銭, はかりの重り, サイコロ, 琴などが出土している。サイコロは六博に使ったと考えられる。

以上が, 高台墓地葬具と出土した副葬品である。次にこの葬具と副葬品の組み合わせについて考えてみたい。

3 副葬品の出土状況

第2節では墓葬の諸要素について分類をおこなってきたわけだが, この分類に基づき, 墓葬ごとに一覧表としての第1表である。この表から副葬品の全種類が, すべての墓葬から出土するわけではなく, 墓葬によって偏りがあることが見て取れる。以下, 特に出土状況に偏りがある副葬品について検討を加えてみたい。ただし漆器・木器については腐食の問題があるため, 参考にとどめる。

(1) 飲食器

飲食器はもっとも出土墓葬数が多い副葬品で, 37基から出土しており, 全く出土品がない6基を除いた何らかの副葬品を出土した墓葬39基の94.9%となる。飲食器は材質やその性格から, (A) 青銅器とその模倣陶器, (B) 日用陶器, (C) 漆器に分けられるが, もっとも出土墓葬数が多いのは日用陶器で墓葬数34基, 飲食器を出土した墓葬の91.9%に達している。これは青銅器および模倣陶器を出土した墓葬17基, 45.9%のほぼ倍である。漆器・木器については参考値となるが, 11基で29.7%にとどまっている。このうち青銅器と日用陶器が共存したのは15基で, これは青銅器・模倣陶器を出土した墓葬の88.2%に上っており, 両者が排他的な関係にはないことがわかる。従って, 飲食器の副葬の基本は日用陶器であり, 青銅器・模倣陶器の副葬はそれに付加された

要素ということになる。

次に飲食器を (A) 青銅器とその模倣陶器, (B) 日用陶器, (C) 漆器に分け, それぞれの内容についてさらに検討を加えてみたい。

(A) 青銅器とその模倣陶器

青銅器や模倣陶器を副葬した墓葬は 17 基だが, その内容を個別に見てゆくと, 以下のように分類できる。

- | | |
|------------------------|-----|
| (a) 青銅器のみを複数器種副葬 | 7 基 |
| (b) 青銅器と青銅器模倣陶器を複数器種副葬 | 2 基 |
| (c) 青銅器模倣陶器のみを複数器種副葬 | 3 基 |
| (d) 青銅器を 1 器種のみ副葬 | 5 基 |

このうち最も多いのは青銅器のみを複数器種副葬した例である。器種別に見ると, 最も出土墓数が多いのは鼎で, 5 基から出土している。そのため鼎はほとんどの器種と同伴しているが, 同じ煮沸器の中の釜とは共伴例がないことは注目される。また鼎と共伴した器種を, その機能ごとにみてゆくと

鼎 煮沸器: 3 基

鼎 供膳器: 3 基

鼎 供酒器: 2 基

鼎 貯蔵器: 5 基

となり, 鼎は貯蔵器と強い結びつきがあることがわかる。

このことは (b) と (c) の青銅器模倣陶器を副葬した場合にもあてはまる。両者を併せると 5 基の墓葬があるが, このうち鼎を副葬した 3 基で, これら墓葬からは例外なく貯蔵器が共伴している。

ところでこの鼎と壺・鉢・蒜頭壺といった貯蔵器の各器種は青銅礼器として戦国時代から使われた器種であり, しかも漢代に入ってからその用途が変わらなかった器種である。本来青銅礼器は飲食物を使った祭祀・儀式をおこなうための器であり, そのため機能の異なった青銅器によるセットで使われた。従って高台墓地で鼎が貯蔵器と共伴する例が多いことは, このような青銅礼器以来の伝統に従った結果と考えられる⁸⁾。

このことは青銅器模倣陶器にもみられる。青銅器模倣陶器を出土した墓葬のうち 17・18 号墓では鼎 盒 貯蔵器 (壺) がセットになっている。このセットは戦国時代後期からみられるものであり, やはり伝統に従った組み合わせとなっている。

社会イノベーション学部

番号	葬具	時期	飲 食 器																					
			青銅器・模倣陶器													日用陶器								
			煮沸器			供膳器			供酒器			貯蔵器			壺注器		煮沸器		供膳器					
			鼎	銅釜	銅甌	銅甌	盆	盤	盒	把付 錐壺	柄付 錐壺	匜	壺	紡	蒜頭壺	勺斗	陶釜	陶甌	碗	盤	盆	豆		
M01	木槨木棺 B	1	6					1	3					3	1		1			3				5
M02	木槨重棺	2		1				1			1					1	1							
M04	木槨木棺 A	2	2		1	1	1	1			1			2										1
M05	木槨重棺	2	2			1		1			1	1		2	2	1			1					
M06	木槨木槨 A	2																						
M09	木槨木棺 B	2	1							1					1	1	2							
M13	木棺	2																			1			
M14	木槨木棺 B	2																					3	
M18	木槨木棺 B	2	2						2			1	2			2								2
M20	木槨木棺 B	2	1										1											
M23	木棺	2																						
M24	木棺	2															2	1						
M32	木棺	2																						
M33	木槨木棺 A	2					1													1	1	1		
M35	木棺	2																					1	
M40	木棺	2																						
M42	木棺	2																						
M43	木棺	2																						
M44	木棺	2															1					1		
M45	木棺	2																				1		
M12	木槨木棺 B	3				1									1	1			1	1	1			
M16	木槨木棺 B	3							1					1										
M17	木槨木棺 B	3	1						1					1							1			
M19	木槨木棺 B	3												1		1								2
M30	木棺	3																						
M03	木槨木棺 A	4	1																		1	1		
M11	木槨木棺 B	4	2			1								2		1	1	1						
M21	木槨木棺 B	4		1																				1
M29	木槨木棺 A	4																						
M31	木棺	4																						
M34	木棺	4																		1				
M36	木棺	4															1							
M37	木棺	4		1													1						1	
M39	木棺	4																						
M41	木棺	4																						
M25	木槨木棺 A	5																						
M27	木槨木棺 A	5				1																		
M28	木棺併棺	5															2							
M07	なし	不明																						
M08	なし	不明																						
M10	なし	不明																						
M15	なし	不明																						
M26	なし	不明																						
M38	なし	不明																						

第1表 副葬品の出土状況

荊州高台墓地の構造に関する一考察

										明器		化粧道具		装身具	家具	その他				
										漆器系				木桶	陶模型	漆器	銅鏡			
供酒器	貯蔵器							供膳器	供酒器	貯蔵器	盥注器									
杯	小型			中型			大型		扁壺	漆匙										
	折腹罐	小型高頸壺	矮頸罐	高頸壺	高頸罐	その他	大口壺													
3				1					1					1				璧・印章		
		2	3	3					1	2			倉			杖	几・案・方盤・六博盤・枕	木瑟		
															1		陶薰炉・几・方盤			
			5						1				倉・甕							
						甕型罐2										杖				
			1	1													銅炉			
			2		2															
	2		2	2	2															
			1		1															
					1															
		3			2															
			5	1						1			倉・甕	1		六博盤	璧			
		2	2		1								倉・甕							
			2	2									倉							
					1															
		1	1		1															
					1															
		2	2	2																
			1	1									倉							
1			1	1									倉・甕		帶鈎		木珠			
					1															
		2	4	4						1			倉・甕	1	鉄劍		サイコロ			
			2	3												枕	サイコロ			
				1																
			1	1									倉・甕			方盤				
1																				
		1																		
		1											倉							
		2	2		1												半兩錢 銅鈴			
3	3				1															
3				2	1															
														1	帶鈎	方盤				
2	2	1				小口罐	2						倉	1	銅環	方盤 銅薰炉	銅権			
			1	2			2			2				2		几・案・方盤				

(青銅器・模倣陶器のうち「 」が模倣陶器を表す。また漆器については出土している場合を「 」であらわした)

このようにみてゆくと高台墓地での青銅器及びその模倣陶器の副葬は、戦国時代に青銅礼器とその模倣陶器を副葬した伝統への志向として捉えることができる。

ただし (d) 青銅器 1 器種のみを副葬した墓葬のうち、釜のみが副葬される場合にはさらに検討が必要である。釜が鼎と共伴しないことは先にふれたが、同時に貯蔵具とも共伴した例がない。このことから、釜は鼎や貯蔵器に代表されるような、礼器の系譜に連なる伝統的な器種とは異なった扱いを受けていたと考えられる。分類の所で触れたように、釜は日常生活のなかで使われた煮沸器としての性格をもっており、そのため他の青銅器とは区別されたのであろう。ただし 2 号墓では釜も他の青銅器と共伴しており、全く排他的に扱われていたわけではない。

以上をまとめると、高台墓地における青銅器及びその模倣陶器の副葬は、戦国時代における青銅礼器副葬の伝統をふまえていた。ただし青銅器の中でも釜については他の青銅器とは異なった扱いがなされていた、ということになる。

(B) 日用陶器

この節の冒頭でも述べたように、日用陶器は副葬品を出土した墓葬 39 基のうち、35 基、89.7% から出土しており、最も一般的な副葬品である。このうち煮沸器は 11 基の墓葬から出土しており、日用陶器を副葬した墓葬の 31.4% にあたる。同じように見てゆくと、供膳器は 15 基で 42.9%、供酒器は 3 基で 8.6%、貯蔵器は 32 基 91.4% となる。これからもわかるように日用陶器の中でも貯蔵器が副葬される割合が非常に高い。

貯蔵器はその大きさから小型、中型、大型に分けられたが、貯蔵器を出土した墓葬 32 基のなかでそれぞれを出土した墓葬の割合は、小型が 24 基で 75%、中型が 28 基で 87.5%、大型が 2 基で 6.2% となり、小型と中型の割合が高いことがわかる。両者を同時に出土した墓葬は 20 基、62.5% ととなり、日用陶器を副葬した墓葬のうち 3 分の 2 が小型と中型の貯蔵器を副葬している。

さらに小型の貯蔵器を出土した墓葬における各器種の割合を見ると、折腹罐は 4 基で 16.7%、小型高頸壺が 13 基で 54.2%、矮頸罐が 18 基で 75.0% となり、折腹罐以外の器種の比率が高いことがわかる。また両者が同時に出土している墓葬も 9 基あり、どちらかが出土している墓葬 22 基の 40.1% となっている。

中型では高頸壺が11基で39.2%、高頸罐が16基で57.1%、硬陶罐と繭型罐がそれぞれ1基ずつで3.6%ずつとなっており、高頸壺と高頸罐の比率が高い。しかしこの両者が共存した墓葬はわずか1基しかない。このことは中型貯蔵器の副葬にあたっては、高頸壺と高頸罐のどちらかが選ばれていたことを表わしている。

以上のことをまとめると、日用陶器の副葬の中心は貯蔵器であり、これに煮沸器、供膳器、供酒器などが加わる。貯蔵器では小型と中型の副葬が多い。そのなかで中型については高頸壺と高頸罐での選択がおこなわれていた、ということになる。

つまり日用陶器を副葬するにあたっては、まず貯蔵器の副葬が考えられ、その中でも小型と中型の器種が想定された。そして具体的な器種としては、小型の貯蔵器では小型高頸壺か矮頸罐、または両者が選ばれ、中型では高頸壺と高頸罐の間で選択がなされた。そのうえで必要に応じて煮沸器、供膳器、供酒器などの器種が副葬品として選ばれたのである。

このようにみていくと、貯蔵器の器種選択方法が、複数器種選択可能な小型と、択一式の中型といったように、異なっていることがわかる。このうち小型については、小型高頸壺と矮頸罐では頸部から口縁部の形状が異なっていることから、内容物や用途に違いが考えられ、そのため両者が副葬された場合もあったと考えられる。

それに対して中型の貯蔵器である高頸壺と高頸罐は、いずれも頸部が長い形状をしており、内容物や用途は同じであったと想定され、そのため択一的な選択がなされたと考えられる。では高頸壺と高頸罐の選択の基準はどこにあったのであろうか。

高頸壺と高頸罐の製作技法を比較すると、高頸壺は表面を黒色化したり、暗紋を施すなど、造りも丁寧で装飾的である。それに対して高頸罐は器面に制作時のタタキ痕を残し、装飾もない。従って高頸壺は精製、高頸罐は粗製と位置づけることができる。つまり高頸壺の方が副葬品としては上位に位置づけることができるのである。

さらにこのことを敷衍すれば、中型の貯蔵器を選択するときに高頸壺を選んだ墓葬の方が、高頸罐を選んだ墓葬よりも階層的には上位に位置づけられることになる。ただし両者を共に副葬した墓葬も1基ではあるが存在すること、同時に副葬された他の日用陶器には違いが見られないことからすると、階層差は

あるものの、その差は大きなものではなかったとも考えられる。

(C) 漆器

漆器については墓葬による腐食の度合いが異なることもあり、直接的な比較は難しい。あくまでも現状による限りではあるが、何らかの漆器の飲食器を出土した墓葬は11基で28.2%にとどまっている。

(2) 明器

明器には木俑と陶模型があるが、木俑は腐食のため必ずしも全部が残るわけではないので、残る確率の高い陶模型を取り上げる。陶模型には倉と竈がある。いずれかを出土した墓葬は14基で、副葬品があった墓葬39基の36.0%にすぎない。このうち倉と竈の両者を副葬したのは6基、倉のみを副葬した墓葬は5基、竈のみの墓葬は3基である。

(3) 化粧道具

化粧道具については、発掘時の出土状況が本来の副葬状況を反映しているとは限らないが、参考としてみておく。出土した墓葬数は9基で、副葬品を出土した墓葬の23%にとどまっている。鏡は8基から出土しており、副葬品を出土した墓葬の20.5%にすぎない。

(4) 装身具

装身具には帯鉤・杖・鉄剣などがあるが、出土数は帯鉤が2基、杖もやはり2基、鉄剣は1基といずれも多くない。

(5) その他の器物

その他の器物としては玉璧、印章、半両銭などがあるが、これらの器物を出土した墓葬は多くはなく、葬送に必ずしも必要ではなかったと考えられる。むしろ副葬される場合がかなり特別な条件下と考えられる。

以上が副葬品の出土状況である。高台墓地では副葬品が出土した墓葬の95%近くで飲食器が副葬されており、副葬品の中心であったことがわかる。その中でも日用陶器の割合が高いことから、日用陶器が副葬品の基本と考えられる。

従ってその他の副葬品は、それに付加された要素ということになる。つまり墓葬を造営し、埋葬する副葬品を準備するにあたり、基本となったのは日用陶器であり、さらに墓葬ごとの事情でその他の副葬品が加えられたのである。

このことをふまえて、次に主体部と副葬品の関係を検討してみたい。

5 主体部と副葬品の関係及び墓葬の分類

主体部の分類に基づくと、木棺墓が17基で37.8%、木槨木棺墓は21基で46.7%、葬具不明が6基で13.3%になる。従って、木槨木棺墓の方が木棺墓よりも若干多いことになる。また木槨木棺墓のうち、木槨木棺墓Aが7基で33.3%、木槨木棺墓Bが11基で52.3%、木槨重棺墓が2基で9.5%、木槨併棺墓が1基で2.2%になる。この各墓葬と副葬品の組み合わせについて、出土数が多い副葬品を選び検討する。

(1) 飲食器のうち青銅器・模倣陶器との関係

青銅器と模倣陶器を副葬した墓葬は木棺墓1基、木槨木棺墓16基で圧倒的に木槨木棺墓が多い。木槨木棺墓のうち木槨木棺墓Aでは6基中4基、木槨木棺墓Bでは12基中11基、木槨重棺墓では2基すべてから青銅器・模倣陶器の副葬があるが、木槨併棺墓からは出土していない。また模倣陶器はいずれも木槨木棺墓Bから出土している。

以上の検討から、青銅器は主に木槨木棺墓に副葬されている事がわかる。唯一青銅器を出土した木棺墓である37号墓からの出土品は蓋が1点となっている。先に蓋は他の青銅器を区別された存在であるとしたが、木棺墓からは蓋1点のみが出土したことは、この説を補強するものである。

(2) 飲食器のうち日用陶器との関係

木槨木棺墓のうち木槨木棺墓Aでは7基、木槨木棺墓Bでは9基、木槨重棺墓、木槨併棺墓では全ての墓葬から日用陶器が出土しており、木槨木棺墓21基のうち19基から日用陶器が出土している。また木棺墓では17基のうち16基から日用陶器が出土している。このように木槨木棺墓、木棺墓を問わず日用陶器の副葬例が多いことがわかる。

日用陶器の中では貯蔵器の割合が高く、特に高頸壺と高頸罐のいずれかが選

扱われることが多いことは既に述べたが、これを主体部との関係で見ると、木棺墓では高頸壺 2 基、高頸罐 12 基で、うち 1 基からは両者が出土している。従って木棺墓では圧倒的に高頸罐の出土例が多い。それに対して木槨木棺墓では高頸壺 13 基、高頸罐 2 基で、逆に高頸壺が多いことがわかる。

つまり精製の高頸壺は木槨木棺墓と、粗製の高頸罐は木棺墓と関係が強いことになる。

(3) 飲食器のうち漆器との関係

漆器を出土した墓葬は 11 基あるが、全てが木槨木棺墓である。内訳は木槨木棺墓 A が 7 基中 5 基、木槨重棺墓・木槨双棺墓は全てから、木槨木棺墓 B は 11 基中 3 基から出土している。このなかでは木槨木棺墓 B から出土する割合が他に比べて低くなっていることは注目される。

(4) 明器との関係

陶模型に限ってということになるが、出土した墓葬 15 基のうち、木槨木棺墓が 9 基、木棺墓が 6 基である。それぞれの中での割合は、木槨墓が 42.9%、木棺墓が 35.3% で若干木槨木棺墓のほうが高いが、大きな差はない。つまり陶模型に関しては、特定の主体部との強い結びつきはなく、一定の割合で副葬されていた、ということになる。

木槨木棺墓のなかでは木槨木棺墓 A では 7 基中 4 基、木槨重棺墓・木槨双棺墓は全てから、木槨木棺墓 B は 11 基中 2 基から出土している。木槨木棺墓 B から出土する割合が他に比べて低くなっている。

(5) 化粧道具、その他の副葬品との関係

化粧道具を出土した墓葬は全て木槨木棺墓である。木槨木棺墓のなかでは木槨木棺墓 A では 7 基のうち、漆器を出土したのは 4 基、鏡は 5 基、木槨重棺墓は 2 基のうち漆器は 1 基からで鏡の出土はない。木槨双棺墓は漆器・鏡とも出土。木槨木棺墓 B は 11 基中、漆器は 3 基、鏡は 2 基から出土している。

ここまでの検討から、次のようなことがわかる。

まず主体部により副葬品に違いがあることが確認できた。総じて木棺墓では副葬品の種類が少なく、木槨木棺墓の方が多様な副葬品がみられる。具体的に

見てゆくと、木棺墓では日用陶器が主となっているのに対して、木槨木棺墓では日用陶器も副葬されるが、同時に青銅器や模倣陶器が副葬される例が多い。さらに参考にとどまるが、飲食器の漆器、化粧道具なども木槨木棺墓に集中している。また日用陶器の中でも精製の高頸壺は木槨木棺墓に集中している。

ただし木槨木棺墓と木棺墓では副葬品が全く異なるわけでもない。木槨木棺墓のなかにも日用陶器のみを副葬する例もあり、また陶模型のように両者での割合がほぼ同じ例もある。

以上のことと前節で取り上げた副葬品の出土状況から、高台墓地では主体部や副葬品の種類などに、墓葬によって差異が認められることが明らかになった。すなわち高台墓地での埋葬の基本は木棺墓で日用陶器を副葬するといったものであるが、これに主体部では木槨、副葬品では青銅器や模倣陶器、飲食器の漆器、化粧道具、日用陶器の中でも精製品などが付加されることで、墓葬間の差異が生じるのである。

そして付加される要素は墓葬によって違いはあるものも、集中する傾向があることも認められる。つまり木槨を具える墓葬には、青銅器や漆器の飲食器や化粧道具が副葬され、日用陶器でも精製品が選ばれるのである。従って高台墓地では、付加される要素が多い木槨木棺墓が、木棺墓に対して階層的には上位に位置することになる。

ここまでのことから高台墓地では葬具や副葬品の違いに注目することで、墓葬を分類できることが明らかになったと思う。問題はどの要素を重視するかであるが、ここではまず葬具の違いに注目し木槨木棺墓・木棺墓・無槨木棺墓の3種に分類したい。

そのうえで青銅器及び模倣陶器の有無にも注目したい。高台墓地では戦国時代以来の青銅礼器が多分に意識されており、青銅器・模倣陶器の有無は墓葬を分るうえでの重要な要素となる。ただし蓋については取り扱いが異なることは注意しておく必要がある。また模倣陶器のみの墓葬も区別する必要がある。

この主体部の違い、青銅器の副葬の有無に注目して墓葬を分類すると以下のようになる。

A類 木槨木棺墓

A1類 木槨木棺墓で青銅器を副葬する

A1b類 木槨木棺墓で模倣陶器を副葬する

- A2 類 木槨木棺墓で蓋を副葬する
- A3 類 木槨木棺墓で青銅器を副葬しない
- B 類 木棺墓
 - B1 類 木棺墓で蓋を副葬する
 - B2 類 木棺墓で青銅器を副葬しない
- C 類 無棺槨墓

以上の分類では、木槨木棺墓、すなわち A 類の墓葬がもっとも上位の階層であり、これに B 類の木棺墓、そして C 類の順で下位の階層となる。ただし A 類・B 類内の小分類については階層的な違いは想定できず、あくまでも青銅器を副葬する志向の有無を表しているにすぎない⁹⁾。

次にこれら各類の墓葬が墓地内でどう分布しているかを検討してみたい。

4 各類型の分布

第 8 図は上記の分類に従って、それぞれの墓葬の位置を全体図に表したものである。この図から明らかなように、各類型の墓葬は墓地全体に広がっているわけではなく、明らかに偏りが見られる。すでに述べたが報告書では墓葬の全体的な分布から、高台墓地を 4 つの地区に分けている。この区分に従って各地区の特徴を見てみたい。

(1) 第 1 地区

墓地北部の墓葬群で、墓葬の分布はやや散漫である。この地区では A1 類の墓葬が集中しているのが特徴である。14 基の墓葬のうち、12 基が A1 類で、それ以外には A3 類が 1 基、C 類が 2 基あるのみである。

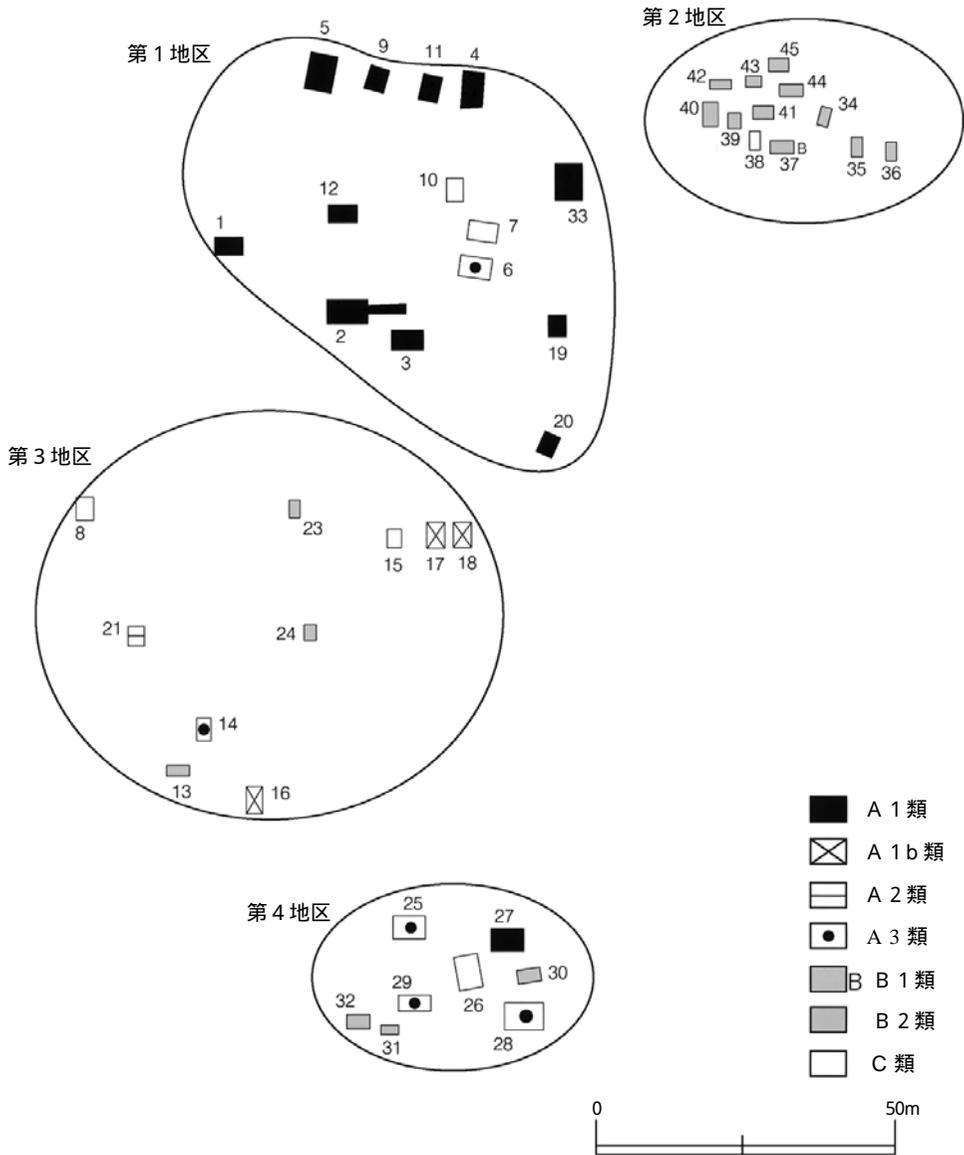
(2) 第 2 地区

墓地東北部の墓葬群で、12 基の墓葬は狭い範囲に集中している。この地区の墓葬は C 類が 1 基ある以外は、すべて B 類である。そのなかで、B1 類が 1 基ある他は、すべて B2 類である。

(3) 第 3 地区

墓地中部に位置している。10 基の墓葬があるが、各墓葬は散在しており、第 2 地区とは対照的である。墓葬の類別も一定せず、A1 類はなく、A1b 類が 3 基、A2 類が 1 基、A3 類が 1 基、B2 類が 3 基、C 類が 2 基となっている。

荊州高台墓地の構造に関する一考察



第8図 各類型墓の分布

(4) 第4地区

墓地南部に位置しており、8基の墓葬が集中して分布する。ただし墓葬の類別は多様で、A1類が1基、A3類が3基、B2類が3基、C類が1基となっている。

以上のように各地区に分布する墓葬の傾向には違いが見られる。すなわち主体部や副葬品が共通した墓葬が集中する第1地区・第2地区と、ばらつきが見

られる第3地区・第4地区である。

このうち第1地区における墓葬のありかたから、この地区では木槨木棺墓を造り、青銅器の副葬を志向した葬送が集中しておこなわれていたことがわかる。同じように、第2地区では木棺墓で日常陶器を副葬した葬送おこなわれていたことになる。

これに対して、第3地区・第4地区では主体部、副葬品とも定まった傾向は認められない。

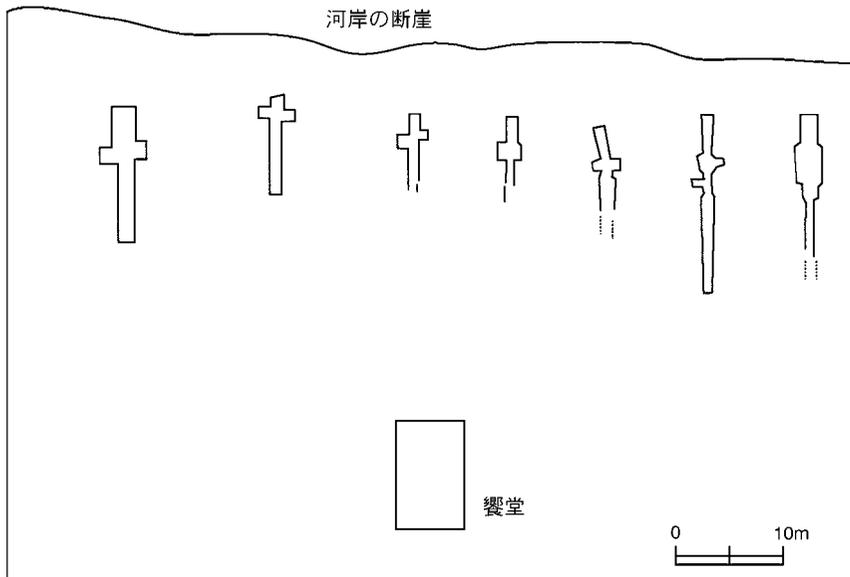
ところで報告書では高台墓地は「いくつかの家族墓（少なくとも4つ）から成り立っている」と記述している。この点はどうか。

ここで注目したいのは17号墓と18号墓である。この2基の墓葬は第3地区東側に位置しており、第1地区に近い。いずれも木槨木棺墓で、墓坑方向も同じで隣接している。副葬品に青銅器は含まないが、代わりに模倣陶器があり、その組み合わせは鼎 盒 壺となっている。模倣陶器を副葬した墓葬は、この2基の他に2基があるのみであり、高台墓地では多くはない。

このように17号墓と18号墓が同じタイプの模倣陶器セットを副葬し、しかも隣接して、同じ墓坑方向であるという点は、偶然とは考えられず、この2基の墓葬は意図的に並べられたと考えられ、この両者は家族であった可能性が高い。さらに17号墓の西側には副葬品を出土せず、葬具もない15号墓もあり、これも17・18号墓に隣接し、しかも墓坑方向が同じことから、関連する可能性がある。第9図は後漢時代の楊氏一族の墓地¹⁰⁾で、各墓葬は方向を同じくして並んでおり、高台墓地の状況と同じである。

同じように葬具・墓坑方向がほぼ等しく、副葬品も似通った墓坑としては、第1地区の4・5・9・11号墓を挙げるができる。報告書では5・9号墓、4・11号墓に分け、それぞれを夫婦墓と考えているが、それを拡大してこの4基に家族としてのまとまりを想定することも可能であろう。このように第1地区ではすくなくとも1つの家族が連続して墓葬を造営していたわけだが、第1地区の他の墓葬は墓坑方向を違えており、5号墓などとの直接的な関連をつかむのは難しい。ただし第1地区は高台墓地で最も古い地区であり、この地区から高台墓地の形成が始まったことを考え合わせれば、同じ様な志向を持っているとはいえ、全く関連がない人々が集まったとも考えづらい。やはり何らかの血縁関係を持つまとまりがあったと考えるべきであろう。同じことは第2地区にもあてはまる。

荊州高台墓地の構造に関する一考察



第9図 楊氏墓地

第4地区については墓葬が集中してはいるが、木槨木棺墓と木棺墓が混在しており、第1地区、第2地区とは状況が異なる。ただし編年的には第2段・第3段では木棺墓がそれぞれ1基、第3段では木棺墓、木槨木棺墓がそれぞれ1基ずつ、第4段に木槨木棺墓3基と木棺墓から木槨木棺墓へと変化しており、墓坑方向も26号墓を除けばほぼ一定していることを考慮すれば、やはり血縁関係を持つ集団であり、中途から木槨木棺墓の造営を始めたと考えられるであろう。

難しいのは第3地区で、墓坑方向はほぼ一定だが、かなり散在している¹¹⁾。この中には先に述べた15・17・18号墓のような血縁と考えられる墓葬群もあるが、その他の墓葬との違いは大きい。従って、第3地区は全体としてのまとまりはなく、家族墓や単独の墓葬がまとまった結果と考えられるべきであろう。

まとめ～高台墓地の構造

以上検討した内容は多岐にわたったが、最後に高台墓地の構造についてまとめてみたい。

高台墓地では44基の秦漢墓が調査されたが、その内容は均一ではなく、主体部や副葬品には階層的な差異が認められた。下位階層は木棺墓、主な副葬品

は日用陶器であった。それに対して上位階層の墓葬は木槨木棺墓で、日常陶器も副葬されるが、それに加えて飲食器では青銅器とそれを模倣した陶器や漆器、化粧道具などが副葬され、また日用陶器でも精製の高頸壺が選択されるといった傾向が見られた。このように墓葬に違いがあることから、本稿では主体部の違いにまず注目し、さらに青銅器とその模倣陶器の有無を考え合わせることで、墓葬を7類型に分類した。

そのうえで各類墓葬の分布を見ると、同じ類型の墓葬が集まった第1地区・第2地区、墓葬にばらつきがある第3地区・第4地区に分けられた。さらに墓葬の集中度などを考慮すると、第1地区・第2地区・第4地区は血縁者の墓地と考えられる。このうち第1地区と第2地区では墓地の継続期間を通じて同じ傾向の墓葬を造営し、安定した墓群が続いている。第4地区では木棺墓から木槨木棺墓への変化が認められ、この集団の発展が伺える。これに対して第3地区は単一の集団の墓地ではなく、複数の血縁集団や個人の墓葬が散在する場所と考えられる。つまり高台墓地では北側の2つ、南側の1つの血縁集団の墓地があり、その中間には集団に属しない墓葬が散在していたのである

- 1) 荊州博物館「江陵高台18号漢墓発掘簡報」(『文物』1993年第8期)
- 2) 湖北省荊州博物館『荊州高台秦漢墓』(2000年 科学出版社 北京)
- 3) 墓地研究の方法等については上野祥史の研究から大きな示唆を受けた。
上野祥史「漢墓資料研究の方向性」(『国立歴史民族博物館研究報告』第108集 2003年)
- 4) この点については以下の論文を参照。
好並隆司「鼎のゆくえ」(同氏著『商君書研究』所収 1992年 淡水社 広島)
- 5) 例えば諸侯王の墓葬である満城漢墓からは青銅製の飲食器が多量に出土しており青銅器が重視されていたことがわかる。
中国社会科学院考古研究所、河北省文物管理处『満城漢墓発掘報告』(1980年 文物出版社 北京)
- 6) 林巳奈夫は盆についてこのような多様な用途を想定しているが、ここで取り上げたように高台墓地5号墓から出土した盤は煮沸にも使われたと考えられることから、盆と同じような用途が想定される。林による盆の考察については、以下の著作を参照。
林巳奈夫編『漢代の文物』(京都大学人文科学研究所 1976年 229頁)
- 7) 林巳奈夫編『漢代の文物』(京都大学人文科学研究所 1976年 233頁)
- 8) 青銅礼器のセットについては以下の拙稿を参照。
小澤正人「東周時代青銅礼器の地域性とその背景」(『中国考古学』第5号 2005年)
- 9) 漢書卷67朱雲伝には、
(朱)雲年七十餘、終於家。病不呼醫飲藥。遺言以身服斂、棺周於身、土周於槨、為丈五墳、葬平陵東郭外。

荊州高台墓地の構造に関する一考察

とあり、漢代には死者が「遺言」のような形で埋葬法を指示した事例が見られ、埋葬にあたっては死者や家族の志向が反映したと考えられる。

- 10) 陝西省文物管理委員会「潼関吊橋漢代楊氏墓群発掘簡記」(『文物』1961年第1期)
- 11) 第3地区中央には墳丘を伴う大型の西晋墓があり、その造営が影響を与えた可能性も考慮したが、墳丘下から確認された墓葬もあり、調査時の墓葬の分布状況とは大きな違いはなかったと考えられる。

付記 本稿は平成17年度学術振興財団科学研究助成「長江上中流域における秦漢帝国による地域統合の研究」(代表者小澤正人)による研究成果の一部である。